

**[D年] 聖霊降臨節第9主日(2024年7月14日)****【旧約聖書日課】イザヤ書 43章1～13節**

- 1 ヤコブよ、あなたを創造された主は  
イスラエルよ、あなたを造られた主は  
今、こう言われる。  
恐れるな、わたしはあなたを贖う。  
あなたはわたしのもの。  
わたしはあなたの名を呼ぶ。
- 2 水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。  
大河の中を通っても、あなたは押し流されない。  
火の中を歩いても、焼かれず  
炎はあなたに燃えつかない。
- 3 わたしは主、あなたの神  
イスラエルの聖なる神、あなたの救い主。  
わたしはエジプトをあなたの身代金とし  
クシュとセバをあなたの代償とする。
- 4 わたしの目にあなたは価高く、貴く  
わたしはあなたを愛し  
あなたの身代わりとして人を与え  
国々をあなたの魂の代わりとする。
- 5 恐れるな、わたしはあなたと共にいる。  
わたしは東からあなたの子孫を連れ帰り  
西からあなたを集める。
- 6 北に向かつては、行かせよ、と  
南に向かつては、引き止めるな、と言う。  
わたしの息子たちを遠くから  
娘たちを地の果てから連れ帰れ、と言う。
- 7 彼らは皆、わたしの名によって呼ばれる者。  
わたしの栄光のために創造し  
形づくり、完成した者。
- 8 引き出せ、目があっても、見えぬ民を  
耳があっても、聞こえぬ民を。
- 9 国々を一堂に集わせ、すべての民を集めよ。  
彼らの中に、このことを告げ  
初めからのことを聞かせる者があるか。  
自分たちの証人を立て、正しさを示し  
聞く者に、そのとおりだ、と  
言わせよう者があるか。
- 10 わたしの証人はあなたたち  
わたしが選んだわたしの僕だ、と主は言われる。  
あなたたちはわたしを知り、信じ  
理解するであろう  
わたしこそ主、わたしの前に神は造られず  
わたしの後にも存在しないことを。
- 11 わたし、わたしが主である。  
わたしのほかに救い主はない。

- 12 わたしはあらかじめ告げ、そして救いを与え  
あなたたちに、ほかに神はないことを知らせた。  
あなたたちがわたしの証人である、と  
主は言われる。わたしは神
- 13 今より後も、わたしこそ主。  
わたしの手から救い出せる者はない。  
わたしが事を起こせば、誰が元に戻しえようか。

**【使徒書日課】使徒言行録 27章33～44節**

33夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。34だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」

35こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。36そこで、一同も元気づいて食事をした。

37船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。38十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

39朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。40そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かつて進んだ。41ところが、深みに扶まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。42兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、43百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどませた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、44残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章16～21節**

16夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。17そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。18強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。19二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。20イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」21そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 43章1～13節

- 1 しかし、ヤコブよ、あなたを創造された方  
イスラエルよ、あなたを形づくられた方、  
主は今、こう言われる。  
恐れるな、私があるあなたを贖った。  
私はあなたの名を呼んだ。  
あなたは私のもの。
- 2 あなたが水の中を渡るときも  
私はあなたと共におり  
川の中でも、川はあなたを押し流さない。  
火の中を歩いても、あなたは焼かれず  
炎もあなたに燃え移らない。
- 3 私は主、あなたの神  
イスラエルの聖なる者、あなたの救い主。  
私はエジプトをあなたの身代金とし  
クシュとセバをあなたの代わりとする。
- 4 あなたは私の目に貴く、重んじられる。  
私はあなたを愛するゆえに  
人をあなたの代わりに  
諸国の民をあなたの命の代わりに与える。
- 5 恐れるな、私はあなたと共にいる。  
私は東からあなたの子孫を連れて来させ  
西からあなたを集める。
- 6 北に向かって、「差し出せ」と言い  
南に向かって、「引き止めるな」と言う。  
私の息子たちを遠くから  
娘たちを地の果てから連れて来させよ。
- 7 それは、私の名で呼ばれるすべての者  
私の栄光のために創造し  
形づくり、私が造り上げた者。
- 8 目があっても見えない者を  
耳があっても聞こえない者たちを連れ出せ。
- 9 国々はすべて一堂に集められ  
諸国の民が集められた。  
彼らの中に、このことを告げ  
初めにあったことを聞かせる者があろうか。  
自分たちの証人を出して、正しいと証言させ  
それを聞いた者に、「彼らは正しい」と言わせよ。
- 10 あなたがたは私の証人  
私が選んだ私の僕である——主の仰せ。  
あなたがたが私を知って、信じ  
それが私であると悟るためである。  
私より前に造られた神はなく  
私より後にもない。
- 11 私、私が主である。  
私のほかに救う者はいない。

- 12 私が告げ、救い、知らせた。  
あなたがたの中に、ほかに神はない。  
あなたがたは私の証人——主の仰せ。  
私が神である。
- 13 これから後も私が神である。  
私の手から救い出せる者はない。  
私が実行すれば、誰が元に戻せようか。

## 使徒言行録 27章33～44節

33夜が明けかけた頃、パウロは一同に食事をす  
るよう勧めた。「今日で十四日もの間、皆さん  
は不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてしま  
しました。34だから、どうぞ何か食べてください。生き  
延びるために必要だからです。あなたがたの頭か  
ら髪の毛一本もなくなることはありません。」35こ  
う言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に  
感謝を献げてから、それを裂いて食べ始めた。36そ  
こで、一同も元気づいて食事をした。37船にいた私  
たちは、全部で二百七十六人であった。38十分に食  
べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。  
39朝になって、どこの陸地であるか分からなか  
ったが、砂浜のある入り江を見つけたので、でき  
ることなら、そこへ船を乗り入れようということ  
になった。40そこで、錨を切り離して海に捨て、同  
時に舵の綱を緩め、吹く風に船首の帆を上げて、  
砂浜に向かって進んだ。41ところが、深みに挟まれ  
た浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首  
がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊  
れだした。42兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げな  
いように、殺そうと計ったが、43百人隊長はパウロ  
を助けたいと思ったので、この計画を思いとどま  
らせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に  
上がり、44残りの者は板切れや船にあるもの〔別訳  
三船の乗組員〕につかまって行くように命じた。  
こうして、全員が無事に上陸した。

## ヨハネによる福音書 6章16～21節

16夕方になって、弟子たちは湖畔へ下りて行っ  
た。17そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファル  
ナウムに行こうとした。すでに暗くなっていたが、  
イエスは彼らのところにまだ来ておられなかった。  
18強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。19二十五ない  
し三十スタディオンばかり漕ぎ出した頃、イエス  
が湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、  
彼らは恐れた。20イエスは言われた。「私だ。恐れ  
ることはない。」21そこで、彼らはイエスを舟に迎  
え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す  
地に着いた。

## 黙想のためのノート

## 次主日の教会暦と聖書日課

- ・7月14日「聖霊降臨節第9主日」の日課主題は「破局からの救い」。
- ・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、第二イザヤのイスラエルに対する贖いを告げる箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、ローマに護送されるパウロ一行の乗船した船が嵐により難破したときのことを伝える箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、パンの出来事の後に主イエスが弟子たちと湖を渡っていく際の出来事を伝える箇所。

## 旧約日課(イザヤ 43 章より)

- ・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一巻として置かれた預言文書。前半(39章まで)は標題のとおり前8世紀に南王国ユダの四代の王に仕えた宮廷預言者イザヤの預言句集と預言活動をまとめた「預言者の書」となっているが、後半(40章以下)は、歴史上の宮廷預言者イザヤから150年以上後、キュロス王のペルシア帝国支配が始まる時代背景の中でイザヤの後継者を自認する祭司・預言者集団によって告げられた預言句集となっている。後半部分は、学術的には「第二イザヤ」と呼ばれてきた。「第二イザヤ」は、ペルシア支配下でバビロン捕囚を解かれ、旧南王国の支配層を中心にユダ・エルサレムへの帰還と一定の自治的共同体再建事業が始まる中で告げられたものと考えられている。この帰還・共同体再建事業については、「エズラ・ネヘミヤ記」が伝えている史料のほかにはほとんど手掛かりがないが、概ね100年ほどの期間をかけて後代に繋がる「ユダヤ教共同体」の根幹が成立したと推認されている。その根幹を為した事業の一つが「エルサレム神殿再建」であり、もうひとつが「正典編纂」であるが、他方で思想的根幹を為したものとして、「大イスラエル主義」と「ユダ・ダビデ王家至上主義」という相反する思想が見いだされる。後に、「大イスラエル主義」は普遍主義的なユダヤ教を、「ユダ・ダビデ王家至上主義」は民族主義的なユダヤ教を方向づけることになるが、紀元後以降の時代に生き残ったのは、「ラビ的ユダヤ教」や「キリスト教(ユダヤ教キリスト派)」のような普遍主義的な思想に立つユダヤ教である。「イザヤ書」は、前半には「ユダ・ダビデ王家至上主義」の傾向が見られるが、後半(第二イザヤ)には明確に「大イスラエル主義」に基づく普遍主義的思想が見いだされ、総体としては民族主義的思考を超克した普遍主義的思考を提示したものとなっている。
- ・日課箇所は、「第二イザヤ」として扱われる箇所、**「ヤコブ」**や**「イスラエル」**は、(前半39章までのように)北王国を指してではなく、南王国ユダを中心に再興される**「大イスラエル」**を意味して用いられていると考えられる。

## 使徒書日課(使徒 27 章)

- ・「使徒言行録」については、前回資料「聖書と祈りの会 240703」および前々回資料「聖書と祈りの会 240626」も参照。
- ・日課箇所は、エルサレム滞在中に当局に捕らえられ、カイサリアの総督府に幽閉されていたパウロが、総督フェストゥスに対して皇帝への上訴を求め、許されてローマに移送される際、乗り合わせた船が嵐に見舞われ難破しながら全員避難上陸を果たした出来事を伝える場面。
- ・パウロのローマ行きは、彼がユダヤ総督に対して皇帝への上訴を願い出たことによって実施されたものとして描かれている。他方で、パウロがローマの教会に宛てた「ローマの信徒への手紙」からは、彼自身がローマを訪ねる計画を立てていたことが知られる。おそらく、エフェソを拠点として活動していたパウロが何らかの教会内での対立に巻き込まれて当地での活動から手を引かなければならなくなった状況(使徒19章)の中で、彼は事態を好転させるために、まずエルサレムの第一世代「教会共同体」に対する忠誠を示した上で、使徒ペトロを指導者と戴くローマの「教会共同体」を拠点として次なる宣教活動(エスパニア伝道!)を展開しようと目論んでいたのであろう。このようなパウロの意図を踏まえているからこそ、「使徒言行録」は、パウロの最後のエルサレム行きに関しても、またローマ行きにしても、彼の明確な意志を描き込んでいるのである(使徒21:13、同25:11)。もちろん、「使徒言行録」は、これらのパウロの意志の背後に主=聖霊の示しがあったことを描くのであるが(同20:22、23:11)、それが有無を言わさぬ絶対的なものではなかったことも示唆している(同21:4,11~12)。「使徒言行録」は、「霊」の示しを、絶対的な命令というよりは、各自の意志決定や行動を促すものとして理解しているのであろう。
- ・日課箇所を含むパウロのローマ行き航海は27章全体で描かれているが、これらの叙述は一人称複数形「わたしたち」を主語とする構文で物語られており、本書の著者(ルカ?)が同行していたことが示唆される。同様の構文で物語られる箇所は、16章以降、多く見られる。一般には、実際に著者がパウロの宣教活動に同行していた者であったと推認して解釈されるが、文学技法として航海日誌風の語りを採用している可能性も否定できない。いずれにしても、事実を客観的に記録することよりも、パウロの足跡を劇的に物語ることを意図したものであることは確かであろう。
- ・難船間近の船中で同船者に食事を勧める場面は、これを、いわゆる「パン裂き」になぞらえて描くことで、パウロの宣教活動が内輪的な「教会共同体」の枠を超えた普遍的な救いの共同体としての「教会共同体」を目指すものであったことを示唆しているのだろう。この後、船の座礁にもかかわらず全員が上陸に成功したとの叙述も、同様の救済観を示すものと言える。

## 福音書日課(ヨハネ 6 章より)

・日課箇所は、「パンの出来事」の後、群衆のもとから離れられた主イエスが弟子たちだけを舟に乗って湖の向こう岸に渡らせようとした折に起こったとされる「湖上歩行の奇跡」を伝えている。「マタイ」および「マルコ」が並行記事を伝えている(マタイ 14:22~27、マルコ 6:45~52)。この出来事は、「マタイ」および「マルコ」でも、「パンの出来事」に続く出来事として語られており、一連の説話として早くから共通に伝承されていたと推認される。三つの福音書を比較したとき、「マルコ」と「ヨハネ」は概ね同じように伝えているが、「マタイ」だけはペトロの水上歩行を加えて描いており、独自の視点を与えている。また、「マルコ」はこの説話の末尾に「弟子たちは…パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていた」(マルコ 6:51~52)という説明を加えて「パンの出来事」との関連を明確にしているが、「ヨハネ」も、後段の展開の中で、人々が「パンの出来事」をいかに理解しているか、あるいは理解していなかったかという切り口から主イエスの「パンの教え」が語られたという構成を取っている(ヨハネ 6:22 以下)。

・この出来事で湖を渡って行った先を、「ヨハネ」は「カファルナウム」としているが、「マタイ」および「マルコ」は「ゲネサレト」としている。「マタイ」や「マルコ」が主イエスのガリラヤ宣教時代の拠点ペトロの家のあったカファルナウムと位置づけているのに対して、「ヨハネ」は、主イエスがカファルナウムに滞在したことを限定的にしか取り上げない(2:12 および 6:22~59 のみ)。しかし、「パンの出来事」と「水上歩行の出来事」を前提とした「パンの教え」を語られたのがカファルナウムの会堂であったとすることで(6:59)、「ヨハネ」は、他の福音書とのバランスを取ったのかもしれない。つまり、「ヨハネ」の共同体も、他の福音書と同じ伝承に基づいて主イエスに従う教会共同体の一枝であることを示そうとしているのであろう。

## 来週の誕生日 (7月14日~20日)

## 主日礼拝の讃美歌から

・21-358「小羊をばほめたたえよ！」(= I 164 番「こひつじをばほめたたうる」)は、19世紀英国の詩人ブリッジズの原作を国教会司祭スリングが修正、また全面改訂した結果生まれた諸版が混同再録されてきた讃美歌で、『讃美歌 21』は米国聖公会版からの翻訳。曲は、19世紀英国王室チャペルのオルガニスト・エルヴィーの作曲。

・21-55「人となりたる神のことば」(= I 190「あめよりくだり人となりし」)。作詞のウィリアム・W・ハウは19世紀の著名な讃美歌作家で、英国教会の主教職の傍ら60曲以上の讃美歌を作曲発表している(21-379番など)。曲は、作曲者不詳だが17世紀末の讃美歌集から知られ、メンデルスゾーンのアラトリオ「エリヤ」の合唱にも用いられている。

・21-462「はてしも知れぬ」(= I 292)は、19世紀米国長老派牧師のエドワード・ホッパーが海員伝道に携わる中で作詞したもので、バプテスト讃美歌集に採用された後、広く歌われるようになった。曲は、同時代の楽譜出版業者で自ら作曲もして福音唱歌集の出版を重ねたジョン・グールドが、ホッパーの歌詞をバプテスト讃美歌集に採用する際に作曲。

## 21-358「小羊をばほめたたえよ」

## Crown Him with Many Crowns

1. Crown him with many crowns, / the Lamb upon his throne; / Hark! how the heavenly anthem drowns / all music but its own; / awake, my soul, and sing of him / who died for thee, / and hail him as thy matchless King / through all eternity.
2. Crown him the Son of God / before the worlds began, and ye, / who tread where he hath trod, / crown him the Son of man; / who every grief hath known / that wrings the human breast, / and takes and bears them for his own, / that all in him may rest.
3. Crown him the Lord of life, / who triumphed over the grave, / and rose victorious in the strife / for those he came to save; / his glories now we sing, / who died, and rose on high, / who died, eternal life to bring, / and lives that death may die.
4. Crown him of lords the Lord, / who over all doth reign, / who once on earth, the incarnate Word, / for ransomed sinners slain, / now lives in realms of light, / where saints with angels sing / their songs before him day and night, / their God, Redeemer, King.
5. Crown him the Lord of heaven, / enthroned in worlds above; / crown him the King, to whom is given, / the wondrous name of Love. / Crown him with many crowns, / as thrones before him fall, / crown him, ye kings, with many crowns, / for he is King of all.

## 21-55「人となりたる神のことば」

## O Word of God Incarnate

1. O Word of God incarnate, / O Wisdom from on high, / O Truth unchanged, unchanging, / O Light of our dark sky: / we praise you for the radiance / that from the Scripture's page, / a lantern to our footsteps, / shines on from age to age.
2. The church from you, dear Master, / received the gift divine; / and still that light is lifted / o'er all the earth to shine. / It is the chart and compass / that all life's voyage through, / mid mists and rocks and quicksands, / still guides, O Christ, to you.
3. O make your church, dear Savior, / a lamp of burnished gold / to bear before the nations / your true light as of old. / O teach your wandering pilgrims / by this our path to trace / till, clouds and darkness ended, / we see you face to face.

## 21-462「はてしも知れぬ」

## Jesus, Savior, pilot me

1. Jesus, Savior, pilot me / over life's tempestuous sea; / unknown waves before me roll, / hiding rock and treacherous shoal. / Chart and compass came from thee; / Jesus, Savior, pilot me.
2. As a mother stills her child, / thou canst hush the ocean wild; / boisterous waves obey thy will, / when thou sayest to them, "Be still!" / Wondrous sovereign of the sea, / Jesus, Savior, pilot me.
3. When at last I near the shore, / and the fearful breakers roar / 'twixt me and the peaceful rest, / then, while leaning on thy breast, / may I hear thee say to me, / "Fear not, I will pilot thee."